

おとなの絵本「観音物語」

金龍寺初代の近藤堯常和尚は、六十六歳のとき、総本山長谷寺の本堂七間四面を寒二十一日間、裸足で巡りました。やがて足の裏底が割れ、石畳に血の痕をつけていたようです。昭和二十八年の極寒のときです。

修行結願の朝、本堂主宰の松浪玄明大僧正と堯常は、ご本尊十一面観世音菩薩より「長谷寺の千古の楠にて我が分身を名古屋に造立せよ」という霊夢を賜りました。この奇瑞がもとで、本堂東脇に聳える樹齢二百余年の夫婦楠の一本が堯常に授与されました。

霊木は金龍寺の境内にて、小山亀三郎仏師親子一刀三礼の鑿によって彫刻。昭和三十一年十月、長谷観音ご分身がみごとに完成。翌年三月、落慶法会が三日間にわたり盛況に執行されました。丈七・六トル、光背九トル、名古屋一の高さを誇る大観音像です。

私はこの十一面尊のもとで育ち、いつかは観音さまの絵本を作りたいと願うようになりました。堯常の年齢に近づき、やっと念願の『観音物語』が高野山出版社から刊行できました。おとなの絵本『観音物語』をご愛読ください。観音さまは宗派を越えた人気ナンバーワンの仏さまです。

なぜ「おとなの絵本」かといいますと、「世尊偈」二十六話の短編小説には、きわどいストーリーもあるからです。おとなの絵本をこどもにも楽しめるように、観音さまの二十六場面を童画風の挿絵にしました。情景的でしかも瞬間的な観音パワーを、いかに描くかということに苦心しました。

この観音物語の挿絵にふさわしい画家を求めているところ、小説が完結に近づいたころに、横浜市の木俣敏先生(八十九)の前衛的な観音さまの絵に出会いました。先生は若いころから世界各地へ観音像のスケッチ旅行をしておられ、これまで六回の個展を開催されています。

観音経の偈文は大勢の方が暗唱されています。みごとな名文だからです。この絵本を少し開いてパラパラとめくれば、木俣先生の味わいぶかい手書き経文を連続して唱えられます。一句でも覚えてみては如何でしょうか？ ふしぎな観音力の意味にうなづき、新しい気づきが得られるはずです。

\*定価 1.000 円+税 〒310 円  
高野山出版社発行  
金龍寺にて発売中